



これからの多様なボランティアの役割と可能性を探る

一人ひとりの市民が社会を創る一員として、自らできることで社会参加することは、健全な社会創造に不可欠であり、次世代を担う若者への貴重なロールモデルとなる。社会課題に対して、多様な視座を持つ人たちが、ボランティアとして自在に働きかけていく、多様なボランティアの在り方について考える。

ボランティアのはじまり

— 継続は力なりというものの、50年以上ボランティアを続けていらつしゃるといのは、驚異的です。赤字でボランティアを始められる前から、そういう環境にいらしたのですか？

1995年の阪神淡路大震災では、被災地支援のために、全国から1年間で137万人を超えるボランティアが駆けつけた。その半数以上がボランティア初心者。一般にボランティア活動が広まったこの年を、日本の「ボランティア元年」と呼ぶ。

喜谷昌代さんは、赤十字に入って半世紀以上、世界各地でボランティアを続けてきた。ボランティアの先達ともいえる喜谷さんのその軌跡について聞いた。

喜谷 母方の祖母が、大正天皇の貞明皇后のお仕事で、ハンセン病の方のお世話をされていて、少し影響は受けました。といってもまだ子どもで、お手伝いをした訳ではありませんが、父がシンガポールやマレー（現マレーシア）で仕事をいたしており、また国会議員として国会にも出ておりましたので、両親ともに留守が多く、私は祖母に預けられていました。

ボランティアに 捧げた半世紀の 軌跡

英国赤十字評議員

喜谷昌代氏

—現在は、イギリス在住ですね。

喜谷 主人の退職する前の勤務地がロンドンで、そのままずっと。

—ご主人は日本航空に勤務されていて、喜谷さんも日本航空の客室乗務員として乗務されていたとか。

喜谷 終戦の年に、8歳でしたが、父が乗った民間の飛行機がフィリピンの近くで連合軍に撃墜されたので、そこへ自分で行きたいと思うので、最初のフライトのときに折鶴を折って、誰にも知られないように窓に張り付けて、父のところに飛んでいけ、とお願いしました。

—お父様を慕うお気持ち、胸に迫ります。ご結婚されてお仕事は？

喜谷 当時は辞めないといけなくて、喜谷の勤務地のパリに参りました。そのパリから、東京オリンピックのあった1964年に帰ると、聖心女子学院で2年先輩の、当時皇太子妃の美智子さまからお電話が

あって「あなたみたいな人は、他人の苦しみが分かるかもしれない。赤十字で働いたらどう？」とおっしゃって。

—美智子皇后さまがボランティアへ導かれたのですか！

喜谷 はい。当時の日本赤十字本社、青少年課の橋本祐子はしもとゆうこ課長という方を紹介してくださったんです。

—『橋本学校』と呼ばれた方ですね。

喜谷 ええ。さっそくお電話したら「ほんとにボランティアをしたいの？ボランティアというのは、自分の時間も体力も持てるものもなんでも、他の方に捧げる覚悟がないとなれないもの。本当にボランティアをしたいか、したくないか。自分の中でよく考えて、それでもしたいと思ったら、とことん一生懸命やりなさい」とおっしゃられました。

—気軽なボランティアではなく、覚悟をもってやりなさいと。

喜谷 オリジナルは、コンパニオン等にお手当がたくさん出ました。が、パラリンピックには全然予算がなくて、通訳が必要でした。「あなたたちは、長いトンネルの中の一番端の小さい灯になりなさい。その光があれば、トンネルの中にも少しは光が届いて、明るくなるでしょう」と。橋本先生には、こうした愛に溢れた言葉がたくさんあります。

—それに心響いて、始められたんですね。

喜谷 赤十字語学奉仕団（参考1）という名前は、後になってついたんですが、私は英語とフランス語でお手伝いをさせていただこうと。そこから橋本先生のボランティア教育が始まりました。あとになってからですが、先生は東洋で初めて、女性で初めて赤十字のアナリ・デュナン記章もお貰いになった方なんです。

—橋本先生の「したいか、したくないか」の言葉は心に残ります。いまボランティアの3原則（※1）のひとつの自発性は、「自分がやりたい

ときにやればいい」と考えられがちですが、「相手の役にたつことをしようと、自分で決めること」、それがボランティアの本質だと思いません。先生との出会いがすべてですね。

戦禍のサイゴンで

—語学奉仕団を中心に活動されてから、また海外に。

喜谷 1968年に、ベトナムのサイゴン（現ホーチミン市）に参りました。ベトナム戦争のさなかで、着いて2か月後にテト攻勢（※2）が始まりました。日本から、サイゴンにある「The Red Cross Amputee Center」という、負傷して障がいを持った人たちのための施設で、お手伝いするように指令が届いたので、救急看護をやりました。

—ベトナム戦争のさなかで、ご家族は大丈夫でしたか？

喜谷 戦争が激しくなっていて、水が汚くて子どもたちがお腹をこわしても、お医者さまは来てくれない。

夜はロケット砲がすごいので、着の身着のまま階段の下で休んだりしました。そんな状況で1年してタイに避難しましたが、サイゴンを出た最後から二番目の日本人でした。

—ご主人の赴任とはいえ、幼子を連れて…。普通じゃないですよ（笑）それから、どうなさったんですか？

喜谷 バンコクに1年いて英国管轄下の香港に。子どもたちはイギリス人小学校に通い、英国赤十字の香港支部で青少年プロジェクトを企画したり、障がい児の寄宿学校を手伝いました。それからドイツへ。

ポーランドへ救援物資の搬送

—ドイツではなにを？ 聞くのもドキドキしますが（笑）。

喜谷 ドイツ赤十字では人生で一番働いたと思えるくらい、たくさんのお仕事をもらいました。

—言葉はドイツ語ですよ。

喜谷 ドイツ赤十字では、行った途端にドイツ語ができるかと聞かれました。できませんと申しましたら、1年半学校に行つて許可を取らないと、仕事はあげられないと。それで、やってみようと思つたんです。

—止めようと思つたのではなくて？ それは、おいくつときですか？

喜谷 40歳でした。「赤い海の孤島」と呼ばれる西ベルリンは、東ドイツ領の中にあつて兵役が免除されるんです。ですから、語学学校にはスペイン等から若者が来ていて、クラスメイトは10代から20代はじめの人たちばかり。

—でも1年半でマスターなさつて、それからボランティアですか！

喜谷 ええ。ポーランドに戒厳令（※3）がしかれたときには、緊急援助隊員として救援物資を届けました。お薬や食料がなくて普通の人は困っていました。共産国だったので、政府に、募金で集めた寄付金を送ると全部取られてしまいま

※1 ボランティアの3原則：「自主性」「社会性」「無償性」

※2 テト攻勢：ベトナム戦争において1968年2月のテト（旧正月）に行われた解放戦線側の攻勢。



国立成育医療研究センター医療型短期入所施設「もみじの家」竣工記念式典

す。自分たちで、一般の人たちが欲しいものを聞いて購入し、ポーランドに一番近い西ベルリンに集めました。老人、赤ちゃん、妊産婦用と箱に詰めて、大きなトラック13台に積んで、15日間かけてロシアの国境周辺の村に届けるんです。100キロのお米や豆をかついで、トラックから倉庫に運んだりもいたしました。

「まあ、お見受けした感じとのギャップが大きくてびっくりします(笑)。たくましますます。

喜谷 緊急援助隊員として、ドイツ人の中で、外国人でも女性でもただひとり。冬になると、零下20度、30度になります。西ベルリンから行くと、東ドイツに入るときに検査があり、ポーランドの国境でまた検査があつて、洗濯用粉石けんにまでレントゲンを通すので、10時間近く暖房もないところで待たされました。ポーランドに入ってもホテルに泊まれません。学校のキャンプ場等に泊まつて、日持ちするドイツの黒パンとサラミをかじりながら。

「へー！ 1980年代なのに戦時中のお話のようですね。

喜谷 トラックに荷積みをするのに2日ばかりで、出発はたいてい夜中の2時、3時。強面のドイツ人の隊長がいて、いつもその隣に乗せられるんです。すると主人が参りまして、車のド

アの窓から「絶対行かせないぞ、降りろ」とすごい勢いで言うんですよ。でも、日本の方々から、ポーランドの人のために集めた寄付金で購入した必要物資を届ける訳ですし、救済物資の入った段ボールには、日の丸を貼りましたし、責任がありました。

「一途に、そう思われたんですね。どれくらい続けたんですか。やめようとは思わなかったんですか？

喜谷 10回です。冬は厳しかったけれど、6月だと、ポーランドの田舎には一面に麦が育っています。カトリックの国で、そのころには初聖体(※4)の儀式があつて、男の子も女の子も真っ白な洋服を着て歩いているんです。麦畑に矢車草が咲いていて、白い服を着た子どもたちが遊んでいると絵みたいで、忘れられない光景です。いまだに、その人たちと交流がありますよ。

「それは宝物ですね。そのときに日本赤十字社社会有功章」を、ドイツ赤十字からも名誉あるメダル

を受章されたとお聞きしています。

厳しい活動に耐えられたのは、元々強い芯があたりだということと同時に、活動の過程で、鍛えられていったこともあつたんでしょうね。

喜谷 ドイツ赤十字での仕事では、本当に大きく育ててもらったと感謝しております。

刑務所の保護司として

「ほかに思い出深いご活動は？」

喜谷 一番面白かったのは、男子1200人の服役者がいるベルリンの刑務所の保護司をさせていただいたこと。若い男性で、犯罪についてには知らされないんですが、警察官の息子でした。

「そこでは、どんなことを？」

喜谷 最初は、経験のある年配のボランティアの方が付いてくださつて、ドイツ人にしては小柄なノーベルという名前の青年に面会しました。仏頂面で「なんでこんなへん

※3 ポーランドの戒厳令：民主化運動に対し1981年に戒厳令がしかれ、深刻な経済危機となった。
※4 初聖体：カトリック教会で、洗礼後はじめて聖体(キリストの身体を象徴、煎餅型のパン)をいただくこと。

な女が来たんだ」という顔をして、
なにも話してくれませんでした。で
も3回目、4回目と慣れてくると、
自分の母親が作ったお菓子のことを
話すので、次の週に焼いて持って行
きましたら「母親の方がおいしい」
と、貝の口が開くみたいに。

—心を開いてきたんですね。

喜谷 刑期の終わりが近づいてくる
と、外に6時間出られるので、その
付き添いをしました。その場合、逃
げないようにする責任があります。
その日がきて、どこに行きたいかと
聞くと、ステーキが食べたいとい
うので連れていきました。そのあと人
目の多いところに行こうと、プール
に連れていきました。そんなことを
しながら何回か外出をしました。

—外国人の、しかも女性にそういう
仕事を！緊張なさるでしょうね。

喜谷 すごくね。でも、最後には食
べたいものを聞いて、家でご飯を
作って食べさせて、テレビを見たり
しました。

その子の刑期が終わる前に、主人
の転勤でイギリスに行くことになっ
たんですが、しばらくたって知らない
ドイツ人から手紙がきました。
ノーベルが出所して一緒に住んでい
たけれど、あるとき仕事から帰った
ら消えていた。一緒にいる間、私の
話をよくしていたので、もしも彼が
訪ねていったら、帰ってきてくれと
伝えてほしいという手紙でした。で
も、いまだに帰ってきません。玄関
のベルが鳴ると、もしやと思うこと
があります。

—そうかと思うと、知的に障がいの
ある車いすの女の子の独立生活のお
手伝いもさせていたでいて、その子
は工場で働いて、賃金が安いのに一
生懸命貯めて、イギリスまで会いに
来たこともありました。

ヘレン・ダグラスハウスとの つながり

—世界初の小児ホスピス「ヘレン・
ダグラスハウス（参考2）」との出
会いは？

喜谷 イギリスで「もみじプロジェ

クト」という自分のチャリティを作
りました。障がいのある、日本とイ
ギリスの子どもたちの交流を目的
に、1991年に、日本から、障が
のある人と障がいのない青少年を
いっしょにイギリスへ連れていつた
のがはじまりです。そのなかで、「ヘ
レン・ダグラスハウス」を訪問する
機会があり、あまりに「ホスピス」
の考え方が日本と違うので、勉強し
てみたいなと思いました。

2005年と2009年には、
「ヘレン・ダグラスハウス」の6人
の患者さんを連れて、日本へ参りま
した。日本では子どもホスピスな
んて知らない方が多かったので、セ
ミナーなども開きました。

—反応はどうでした？

喜谷 そういうものがあるのか、と
いう感じでした。それを作りた
いと思っています」というと、どう
かしていると思われたみたい（笑）。

—でも、ようやく第1号「もみじの
家」（参考3）ができましたね。

喜谷 ほんとに夢のようです。
—「ホスピス」というと、日本では、
余命がない人が最後の時間を過ごす
施設のように思いますが、それだけ
ではないんですね。

喜谷 レスパイトといいますが、一
時預かって、親御さんにほっとして
いただくことと、看取りのケースも
あります。看取りも普通ですと、病
室で天井を見ながらひとりぼっち。
そんな最後はかわいそうだと思いま
して、最後までご家族といっしょに
いていただいて送ってあげる。お子
さんを亡くすことは、ご家族にとつ
て一番悲しいことなので、ご家族同
士が知り合いになって話し合うこと
で、少しでも悲しみを軽くして差し
上げられればいいと思っています。

—たとえ闘病中でも、その間もお子
さんのかげがえのない人生の時間
ですよ。家のような安心できる団欒
の場をつくり、遊びや学びなど、子
どもらしいひとときを、提供してい
らっしゃるんですね。

きだに・まさよ

幼稚園より高等学校終了まで聖心女子学院に学び、大学は慶応義塾。卒業後日本航空乗務員として乗務し、結婚してパリへ。1964年日本赤十字社に入社し、以後、赤十字のボランティアとして、日本を含めフランス、ベトナム、タイ、香港、ドイツ、英国の7ヶ国で活動。

1985年から今日まで英国に住み、英国赤十字評議員、国際募金委員、教官、センター主任、救急車運転手、救急看護員などを、また、世界で初めて英国にできた「子供のホスピス」の仕事などを行っている。2010年「旭日双光章」受章。

喜谷 最近よく頼まれるのですが、「もみじの家」は0歳から18歳まで。

それ以上の30歳、40歳になったお子さんの親御さんたちは、どんな年をとって面倒がみられなくなる。その先のことが心配で死ぬにも死ねない思いで、年の上の人たちも入れるようなところを作ってくださいとおっしゃる方もあります。

—喜谷さんのご経験から振り返り、ボランティアって何でしょうか？

喜谷 私にボランティアの生活がなかったら、どのように生きていたのかな？と時々思います。普通ではお目にかかれない、社会の中のいろいろな方たちと出会うことができ、たくさんの方の話を聞いて、自分が与えていただいていること、ものが心からありがたいと思えることは、すごく幸せだと思います。ですから幸せになりたいと思う方は、是非ボランティアをされると良いと思います。

そして、橋本先生の言われるように、やりたいと思う方は一生懸命にその仕事に励み、長くそこにどま

れば一層幸せになれると思います。

—ご家族はどのように見ていらっしゃるのでしょうか？

喜谷 主人は最近手伝ってくれますが、どちらかというと「行かせたくない」的でした。子どもたちは、それぞれボランティアの活動しております。一人は、がんでよくなつたお子さんのお世話、もう一人は行動に支障のあるお子さんのお世話を。

—若い方にメッセージがあれば。

喜谷 せっかくなのでいただいた人生なので、楽しく暮らしていただきたいと思えます。楽しいことのなかで、その楽しみを他の人にも分かち合えることをしていただけたら、と思います。多くの方たちとの出会いが、自分を成長させてくれます。辛いことがあっても、もつと辛い思いをしている方がいると知れば、それが自分の力になります。

—ご自身の今後の夢は？

喜谷 私が撒いた小さな種が、みなさまのおかげで少しずつ育っています。「もみじの家」が多くの方のお役に立てるよう、もう少し立派な木に育てなければと思っております。

—厳しい仕事をする中で、ご自身が成長し、幸せになる。それが次の世代の糧になる。ボランティアの真の醍醐味を教えてくださいました。今日はありがとうございました。

インタビュー

公益社団法人日本フィランソロピー協会
理事長 高橋陽子

「2016年6月9日 ザ・プリンス
さくらタワー東京にて」

参考1「赤十字語学奉仕団」

日本赤十字社に属するボランティアグループ。1964年の東京パラリンピックに際して募ったボランティアを母体として翌年に設立。

参考2「ヘレン・タグラスハウス」

ヘレン・ハウスは、1982年にイギリスにオープンした世界初の小児ホスピス。医療ケアが必要な子どもを一時的に預かる施設。タグラス・ハウスは、16歳以上が対象、2004年にオープン。

参考3「もみじの家」

国立成育医療研究センターの「もみじの家」は、自宅で医療ケアを受けている子どもと家族を短期間受け入れる施設。医療ケアに対応しながら、子どもの成長・発達に応じた体験を提供する。http://home-from-home.jp/